



高校生以上では、4割以上の人が本を読んでいない、または、「読まなくても不自由しない」と考えているという現実があります。読書とは本当になくてもいいものなのでしょうか。

# 読書のススメ

人はどのようにして本を読むようになるのでしょうか。

学校読書調査では、読書量と読み聞かせの関係を見ると、「家族に本をよく読んでもらった」小学生で、5月に全く本を読んでいた児童は3%だったのに対し、「全く読んでもらわなかった」児童は8%でした。中学生でも同様の結果となっています。

つまり、幼児期に読み聞かせ体験など、「読書との出会い」がある人ほど、読書好きになる傾向があることがわかります。

町内で、読書との出会いを大切に活動しているグループを紹介します。

## INTERVIEW 1



夏休みの特別おはなし会の様子

松前おはなしを楽しむ会は、ふるさとライブラリーで月に1回、子どもたちを対象としたおはなしかいを開催しています。代表の坂本早苗さんにお話を伺いました。「おはなしを聞くこと、見ることは、テレビや漫画でだってできます。だけどこれらの情報は一方通行です。立ち止まって考える時間も、想像する隙間もあります。子どもたちの成長には、子どもからの問いかけに答えられる環境が欠かせません。読み聞かせは、子どもと大人がコミュニケーションをとりながら、子どもたちに考え、想像する時間を与えることができます。豊かな感受性や想像力を養うためにも、ぜひ小さい時から読み聞かせを通じて、本に触れる機会づくりをしてあげてください」

## 松前おはなしを楽しむ会

## INTERVIEW 2

「最初は、耳の不自由な人のために、お話をテープに吹き込む活動をしていました。作ったテープは、福祉センターの視聴覚室に置いて見ましたが、利用している人の顔が見えず、どんな感想をもつてくれているのかもわからなくて寂しかったんです。だから、コミュニケーションのとれる読み聞かせをはじめました。」

## 朗読ボランティア SAY



朗読ボランティアSAYは、子どもや高齢者を対象に、絵本の読み聞かせや紙芝居、詩の朗読などを行っているボランティアグループです。デイサービスみどりや子育て支援センターなどで活動しています。

代表の八木代志子さんにお話を伺いました。「最初は、耳の不自由な人のために、お話をテープに吹き込む活動をしていました。作ったテープは、福祉センターの視聴覚室に置いて見ましたが、利用している人の顔が見えず、どんな感想をもつてくれているのかもわからなくて寂しかったんです。だから、コミュニケーションのとれる読み聞かせをはじめました。」